

市民プレス

2016年
(平成28年)
7月5日
第73号

発行人 「市民フォーラム」
編集人 原 昭二
制作 デジタル工房
TEL 090(3048)5502
〒353-0004
埼玉県志木市本町2-4-43

E-mail
hara@camelianet.com

SHIMIN PRESS

市民の目線で市民が発信する地域情報紙

WEB SHIMIN

<http://shimin.camelianet.com>

「市民プレス」電子版（無料）を公開しました

<http://pr-shimin.camelianet.com>

電子書籍専用のアプリケーション等でお読み下さい。

CONTENTS

PAGE 1
連載—武蔵野台地の小さな 街の記憶

その一

遺跡が教える古代の暮らしは・・・

=旧石器時代を経て 縄文時代へ=

縄文海進と貝塚 水子貝塚

PAGE 2
縄文時代の土器は 土器が発明されて・・・
「火焰土器」の発見 縄文時代の区分は六つ
「土器編年」とは？

PAGE 3
市内の主な縄文土器編年表
埋蔵文化財包蔵地の分布

PAGE 4
志木市埋蔵文化財センター
「縄文土器の展示」
西原大塚遺跡 174号住居跡土器の出土図



城山貝塚

平成2年に目印の標識の柱が立てられた

成する地形と、沿岸に残された「貝塚」の位置を記入した。

国内で発見された「貝塚」は二千五百個余りだが、ほぼ半分が関東地方に、しかも全体の四分の一近くは、東京湾の東沿岸、特に千葉の海沿いに集中している。

志木市には、現・志木中学校沿いの道路際（柏町四丁目）の斜面に「城山貝塚」が所在している。「城山」とは、この辺り一帯の字の名前で、

復元された住居の内部



遺跡が教える 古代の暮らしは・・・

縄文時代を経て

縄文時代へ

六千年の古えに遡って、発掘されて「小さな街の記憶」を語ることにした。郷土の歴史から始まる、各所に、少なからざるヒト（縄文）の公刊の『志木市史』ほか、多くの郷土資料がすでに知られているの時代と呼ばれ、海面が上昇して、現で、屋上に屋を架すのでは、との東京湾は北方に「奥東京湾」を形

近年、志木市内の各所で、精神的な調査が行われ、多くの貴重な遺跡が発掘された。そのうち最

海面が上昇して海水が侵入し、現在の東京湾は北に「奥東京湾」を形成し、さらに北上して東西に二分され、紀元前六千年ころになると、西側の入江は川越近くまで入り込む。「縄文海進」と呼ばれ、海

奥東京湾と貝塚の分布



一・四 城山の対岸に「水子貝塚」がある・・・

志木市の城山貝塚は規模が小さいが、その北には、もつと規模の大きな貝塚、「水子貝塚」が所在する。縄文時代には、海進によって、現在の柳瀬川に沿って入江が形成されていたので、「水子貝塚」の位置は、丁度、城山の北に当る対岸となる（「水子貝塚」と「城山貝塚」との関係図は次ページを参照）。

規模の大きな「水子貝塚」は、縄文時代前期（5500～6000年前）の代表的な貝塚として、昭和四十四年、国の史跡に指定さ



水子貝塚の全景



水子貝塚公園

武蔵野台地の 小さな街の記憶

ⅡプロローグⅡ

武蔵野台地の先端部に位置する「志木市」は小ぢんまりとした市である。その面積は、全国的に見て最下位に近い（下から七番目）。Ⅱとして人口が高くなる。大型の集合川のまちⅡと呼ばれる志木市は、住宅が統々と建設され、合わせて狭山丘陵を水源とする柳瀬川が北医療・福祉施設のプロジェクトも側を流れ、川越を発した新河岸川急増し、転入する新規の市民は一と志木市役所付近で合流する。さ

古えから現代にまで至る、ノンフィクションの「武蔵野台地の小さな街の記憶」を、本紙の連載として辿ることにしたい。

所から発掘されていることから確かめられ、疑いの無いところである。そして現代に至り、首都東京に近接するため、ベッドタウンとして人口が高くなる。大型の集合川のまちⅡと呼ばれる志木市は、住宅が統々と建設され、合わせて狭山丘陵を水源とする柳瀬川が北医療・福祉施設のプロジェクトも側を流れ、川越を発した新河岸川急増し、転入する新規の市民は一と志木市役所付近で合流する。さ

の街づくりは途切れずに進められた。このような発展的な展開は、それぞれの時代の遺構や遺物が市内の各証拠や記録、絵図などを基底として、真実のストーリーに迫ることを心掛けた。

一・一 縄文土器の時代へ

最寒冷期を記録した、一万九千年ころから地球規模で温暖化に向かう。環境の変化が短期間のうちに起こり、人々は定住すること

を始めて、食料を煮たり貯蔵するための土器が発見した。

面は三メートルくらい上昇して、現柳瀬川の流域は「古入間湾」と呼ばれる水域と化した。志木市の東に当る宗岡地区は海面下に沈み、志木地区との境界は海岸となる。

気温は今よりも一、二度高く、温暖な気候のため、湧き水や海産物が豊かな丘陵の崖線には人々が好んで集まって居住した。

志木市内の発掘調査によって、多数の縄文時代住居が発掘され、遺跡からは、多種多様な縄文人の遺物が出土している。特に、この時代の人々が食べたあと捨てた貝殻などが、「貝塚」として残され、

市内には、その他にも、幾つかの貝塚が確認されたが、農地として耕作され、或いは発掘・調査後に埋められて、地表には残されなかった。



水子貝塚公園

前ページより↓ 当時の居住生活の島で何故、世界の何処よりも早く様子が再現された。また、「水子貝塚公園資料館」が開館して、埋蔵されていた資料の多くが収納、展示されている。

一・六 土器が発明されて・・・石器や木製の器は本来形のある



石器や木製の器は本来形のあるものを加工して生活に供したもののなので「自然物」だが、土器は人類が形の無いものから造形した最初の発明品であり、「人工物」といつてよい。最古級の（「草創期」の）土器には煤や滓が附着していることが多く、煮炊き用であった。狩猟で得られる動物性の食料に加えて、婦女子でも可能な植物性の木の実や根茎の採集によって、一定の土地への長期の滞留を促し、やがて定住生活に移行した。土器による煮炊きは欠かせないものと

一・五 縄文時代の土器は……

なる。

良く知られているように、明治十年（1877）、アメリカの生物学者モース（Edward Sylvester Morse）が横浜から新橋に向かう汽車の中から貝塚を見付けた。この「大森貝塚」から出土した土器を、彼は報告書の中で「Cord Marked Pottery」と呼んだ。その訳語が索紋、縄紋と測されている。

縄文人は、「竪穴式住居」に居住して狩りや漁を行い、木の実を採集して暮らしていた。この頃の主食はどんぐりだったが、そのままだでは苦くて食べられないため、すり潰してから煮ることに、と推

などを経てようやく「縄文」に落ち着いたのである。縄文土器の発見の糸口となった大森貝塚は、ＪＲ京浜東北線・大森駅近くにあつて、遺跡庭園として整備され、線路脇には記念の碑が建っている。

草創期の土器は細い紐状の粘土を巻き上げて作つたため、底が丸いかあるいは尖つているものが多く、装飾はほとんど無かった。石で抑えるか、土に埋めて、煮炊きをしたと考えられる。

縄文土器は北海道を除く日本各地で出土しているが、もつとも古いものは、AMS法（極微量の天然レベルの放射性炭素 ^{14}C を高感度で計測する技術）で測定した値を暦年代に補正すると、約1万5000年前となる。土器は世界各地で発見されているが、どれも1万年をわずかに越える程度の古さなので、素焼きの「縄文土器」は世界最古の土器ということになる。日本列島の区別があつて多様となる。

のち、縄文時代の「早期」になると、輪型にした粘土を積み上げて成型するようになり、そのとき表面に縄を当てて転がすと、輪と輪の繋ぎ目が塞がれるため、ごく自然に縄の文様が付くようになる。これが「縄文」土器の名称の由来である。

一・八 多様な縄文土器

粗製深鉢形、精製深鉢形、浅鉢形、有孔罍付土器、注口土器、火焰土器などが知られる。口が広くて深い形のもが多く、これを「深鉢形」といい、約一万年もの縄文時代を通して、基本形であった。スプーンやシチューのように、蒸釜

縄文人はその後、意図的に装飾を施すようになる。始めは細い棒のようなもので幾何学的な文様を描いていたが、中期になると、粘土を貼り付け立体感を生む技法が

はず、食物をじっくり煮るのに都合が良かったとされ、出土した土器の表面が赤く変色し、煤がついたものも多い。

その極め付き極めつきは、「火焰土器」であろう。縄文時代中期を代表する土器の一種で、燃え上がる炎を象ったかのような形状の土器を指す通称名である。装飾的な縄文土器の中でも、特に裝飾性が豊かな土器である。

長年月の間に土器の形は変化したが、その流れを系統的に整理しようという努力が積み重ねられてきた。遺跡から出土した土器の「形態」とともに注目されたのは「文様」である。

その基準を定めるために、考古学上で定められた「標準遺跡」（又は「基準遺跡」）から発掘された土器

一・七「火焰土器」の発見は・・・
新潟県の南部、十日町市の信濃川右岸段丘上に位置する笹山遺跡から、1980年～1986年にかけて実施された調査によって出土した、指定番号1の代表的な火焰土器（火焰型土器とも）に「縄文雪災^{ゆきはなつり}」との愛称が付けられ、国宝に指定される。



て選び、年代を比定する、というプロセスが提案され、既に定着した。なお、縄文遺跡は関東地方に密集しており、大部分の「標準遺

現代美術のパイオニア、岡本太郎は、昭和25年（1951）、偶然立ち寄った国立博物館で、「火焰土器」を目にする。そして衝撃を受け、絶賛したのであった。

通称・「縄文雪炎」

ゆきほむらひ



「現代人の神経にとつてはまったく怪奇だが、この圧倒的な凄みは日本人の祖先が誇つた美意識だ」。翌年太郎は縄文土器論を發表。当時考古学の一資料に過ぎなかつた縄文土器に、高い芸術性があることを世に知らしめたのであつた。左図は、「縄文土器論」（美術雑誌『みづえ』1952年刊）より。

雑誌『みづえ』より

跡」は現・東京都一帯から選ばれている。

・・・・・・・・・・・・・・・・

標準遺跡 (type site) あるいは標準遺跡 (standard site) は、考古学上の、遺構、遺物又はその一連となる関連性の集合として定義される特定の型式、形式、様式、あるいは、年代、文化期、文化層の命名、簡単に言えば時期区分名命名の契機を与えた遺跡、あるいはその基準となる遺構、遺物が検出された遺跡自身のことをいう。

て縄文時代の区分が比定され、それぞれの遺跡で活動した人の動きを推測する努力が続けられた。

土器の展開を「編年」で迎る志本市当局の遺跡の発掘・調査はすでに半世紀にも及ぶ。次頁に掲出した「縄文土器編年表」によって、その成果を考察することにして、この表の文様と形式を示す「土器の形式」では、特に土器の「文様」に注目したい。

◆約13,000 ～ 10,000年前の草

縄文時代の区分は六つ

前記の「標準土器」という指標で区分され、承認されたるに到つたのは、草創期・早期・前期・中期・後期・晩期という区分である。

る。気候は短期間に寒暖が起こり、環境の変化は厳しかったようだ。しかし、やがて温暖化が進み、氷河が溶けて海水面は上昇して、海

「土器編年」とは？

但し、文字も無かつた時代なの

われる。

で、土器が制作された実年代・絶対年代は分らないので、「土器編年」という概念で年代を論議することになった。

貝類や魚類が新しい食料となつたが、狩猟の獲物は、象や野牛などの大型哺乳動物から中・小の哺乳動物、鹿や猪などに変わつて

この土器の年代は、それより古い、いや新しい、という相対的な、しかも曖昧な推定である。しかし、

「縄文草創期」の志木市内では・・・

編年という概念によって、時間の物差しができて、例えば、同じ時期に、同じ型式の土器が分布する地域と、別の型式が広がる地域の時代区分の論議などは容易になる。

平成四年（1992）に発掘調査された「城山遺跡」から、爪形文系土器一点が出土し、同六年の発掘では、多縄文系土器三点、爪形文系土器一点が発見された。また、

また、土器の地域差は方言に例えられる。違っていたり、似ていたり、縄文土器にも地域による違いや類似性が見られる。そして地

平成十年（1998）には、「田子山遺跡」で有茎尖頭器一点が出土した。「有茎尖頭器」は、有舌尖頭器器ともいい、先端を鋭く尖らせた槍

型式の動きと、その背景となる人の動きとを知る手掛かりが得られるという。

身の柄の部分Ⅱをもつ。

「爪形文系土器」は、土器の表面に貼付けた粘土の紐に爪または爪形様のものを押し当てて模様と

一・九 縄文人の動向を探る

志木市内では、中野・城山・中道・新邸・西原大塚・田子山・市場裏遺跡から出土した土器などによつ

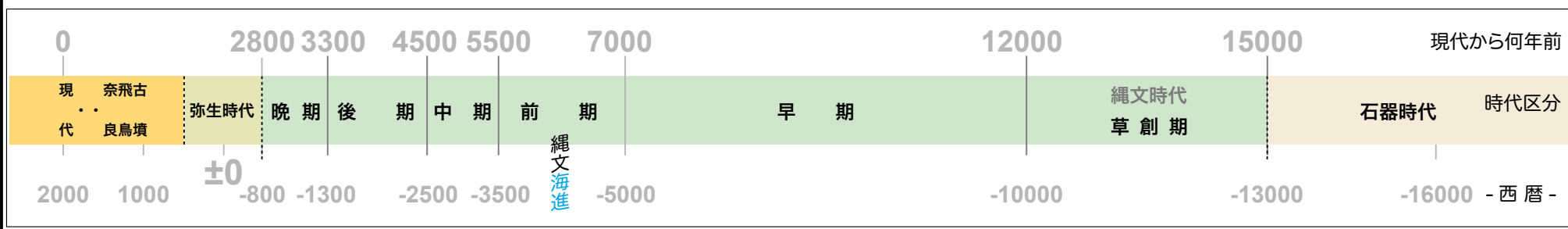
は、縄を器面に押し付けて縄文を作る場合と縄を回転させて作る場合とがあり、↓以下次ページへ

代 · · →

繩 文 時 代

· 弥生時代

←···有史時代···→



志木市内の主な縄文土器編年表

出土した遺跡	土器の形式	区分	今からX年前
中野山 城山 中道 新邸 西原大塚 田子山 市場裏	(出現期土器部)	草創期	13000
	(隆起線文系)		
	爪形文系		
	多縄文系		
	捺糸文系	早期	10000
	夏荷輪 稲荷花		
	貝殻・沈線文系		
	田戸下層		
	条痕文系	前期	6000
	野島 茅打 下吉		
	羽状縄文系		
	花積下層 黒山浜		
	諸磯	中期	5000
	十三草堀		
	五領ヶ台		
	勝坂		
	曾利	後期	4000
	連弧文		
	加曾利E		
	堀之内		
	加曾利B	晩期	3000
	安行1・2		
	安行3		
	千網	時弥代生	2300

前ページより↓ 縄の大小、右捻り、左捻りなどの文様の区別があつて、多様である。草創期の終わるころ、土器の表面に限無く文様を施すようになって登場した。

◇つづく縄文早期は、約10,000

〜6,000年前で、日本列島は大陸から全く離れて島国となる。ドングリやクルミなどの堅果実は、栽培する農法によつて食料資源となつた。狩猟用の弓矢も普及し、また漁労が活発化して貝塚が出現する。

「縄文早期」に志木市内で検出された遺構は・・・

「早期」の土器とされる「捺糸文系」として、夏島式と判断される土器が「新邸遺跡」で発見され（志木市史通史編）、そのあと、恐らく数百年以上の後の時代のものであるのか、「沈線文系」の土器として、田戸下層式に比定されたものの断片が「新邸遺跡」で出土した。また、「新邸・中道・中野・城山遺跡」からは、早期後半の条痕文系土器（主に茅山式）の断片が出土した。市内の縄文人の活動はこの頃、活発だったのでは、と推測されている。早期末葉になると、志木市

「早期」の土器とされる「捺糸文系」として、夏島式と判断される土器が「新邸遺跡」で発見され（志木市史通史編）、そのあと、恐らく数百年以上の後の時代のものであるのか、「沈線文系」の土器として、田戸下層式に比定されたものの断片が「新邸遺跡」で出土した。また、「新邸・中道・中野・城山遺跡」からは、早期後半の条痕文系土器（主に茅山式）の断片が出土した。市内の縄文人の活動はこの頃、活発だったのでは、と推測されている。早期末葉になると、志木市

「早期」の土器とされる「捺糸文系」として、夏島式と判断される土器が「新邸遺跡」で発見され（志木市史通史編）、そのあと、恐らく数百年以上の後の時代のものであるのか、「沈線文系」の土器として、田戸下層式に比定されたものの断片が「新邸遺跡」で出土した。また、「新邸・中道・中野・城山遺跡」からは、早期後半の条痕文系土器（主に茅山式）の断片が出土した。市内の縄文人の活動はこの頃、活発だったのでは、と推測されている。早期末葉になると、志木市

また標識遺跡の稲荷台遺跡は板橋区稲荷台にある縄文早期の、さうか。

◇約6,000〜5,000年前の縄文前期には、気候の温暖化は進み、海水面は4〜5メートル高くなる。既述したように（二夏、「奥東京湾」が形成され、つづいて柳瀬川に「奥入間湾」が侵入する。

「沈線文系土器」の沈線文とは、木、竹、貝などを引きずつて、直線や曲線を描くもので、押捺するときもある。沈線文系・「田戸下層式」土器の模様は、しの竹を半截してその割れ目で沈線をつけるものだが、「条痕文系」では、貝などの腹縁で土器の表面に糸を付ける。

田戸遺跡は早期の田戸下層・上層式土器の標識遺跡で、神奈川県横須賀市田戸台に所在する。「田戸下層式」土器はユニークな形の尖底をもち、また、丸底で口縁に小さな突起のあるものもある。

「条痕文系土器」は、縄文人が早期・終末のころにもたらした土器で、志木市内の各遺跡で発見されるのは、「茅山式」土器が主流を占めている。神奈川県横須賀市に在る「茅山貝塚」を標識遺跡とする基準土器で、多量の繊維を胎

土（土器本体をつくる原料、粘土や砂など）に含む「繊維土器」として知られる。このころ（早期末葉）志木市内の縄文人の住み心地は良くなったようだが、丁度、市内の低地に海水の侵入が激しくなり、内海での食料の獲得が始まったからではないか、と推測されている。

土（土器本体をつくる原料、粘土や砂など）に含む「繊維土器」として知られる。このころ（早期末葉）志木市内の縄文人の住み心地は良くなったようだが、丁度、市内の低地に海水の侵入が激しくなり、内海での食料の獲得が始まったからではないか、と推測されている。

条痕文系土器の分布は、柳瀬川右岸の台地全域に亘つていて、形式も揃っているが、住居跡・土坑などの遺構は発見されていない。そこで、定住するまでには到つてはなかったのではな

この土器群には、花積下層式、関山式、黒浜式が知られているが、何れも、土器をつくる胎土に植物繊維を混入させた「繊維土器」である。

「花積下層式」は、埼玉県春日部市の花積貝塚を、また、「関山式」「黒浜式」は、同蓮田市の関山貝塚、黒浜貝塚を標識遺跡とする土器群で、市内

「新邸遺跡」では、羽状縄文系の花積下層式土器が発見され、城山、中野、中道でも、条痕文系土器と重なって出土している。

「新邸遺跡」で発見された黒浜式の堅穴住居跡は、志木市内では最も古のもので、縄文人の定住化が始まったのでは、と考えられている。住居跡には貝殻などが堆積しており、住居跡内貝塚として貴重な遺構であることが判明した。

また、「城山遺跡」では、関山式、黒浜式土器が発見されている。この遺跡の北側台地の端に「斜面貝塚」として残されているが、その付近から縄文前期後半の関山式ないし諸磯式土器が出土しているの

市内で発掘されるのは、「羽状縄文系土器」で、この系統の土器は、早期終葉の繊維を含む茅山式土器の延長線上に位置付けられていて形成されたとい

羽状縄文をつくるには、右捻り（捻りⅡ右ネジ）の捻り紐を縦において、横方向に転がすと左上がり右下がり縄目が平行に並び、左捻り（捻りⅡ左ネジ）の捻り紐を縦において横方向に転がすと右上がり左下がり縄目が平行に並ぶ。これを同時に施文した縄文を器面に施文する技法、施文は、神奈川県三浦市・

この土器群には、花積下層式、関山式、黒浜式が知られているが、何れも、土器をつくる胎土に植物繊維を混入させた「繊維土器」である。

「花積下層式」は、埼玉県春日部市の花積貝塚を、また、「関山式」「黒浜式」は、同蓮田市の関山貝塚、黒浜貝塚を標識遺跡とする土器群で、市内

「新邸遺跡」では、羽状縄文系の花積下層式土器が発見され、城山、中野、中道でも、条痕文系土器と重なって出土している。

「新邸遺跡」で発見された黒浜式の堅穴住居跡は、志木市内では最も古のもので、縄文人の定住化が始まったのでは、と考えられている。住居跡には貝殻などが堆積しており、住居跡内貝塚として貴重な遺構であることが判明した。

また、「城山遺跡」では、関山式、黒浜式土器が発見されている。この遺跡の北側台地の端に「斜面貝塚」として残されているが、その付近から縄文前期後半の関山式ないし諸磯式土器が出土しているの

市内で発掘されるのは、「羽状縄文系土器」で、この系統の土器は、早期終葉の繊維を含む茅山式土器の延長線上に位置付けられていて形成されたとい

羽状縄文をつくるには、右捻り（捻りⅡ右ネジ）の捻り紐を縦において、横方向に転がすと左上がり右下がり縄目が平行に並び、左捻り（捻りⅡ左ネジ）の捻り紐を縦において横方向に転がすと右上がり左下がり縄目が平行に並ぶ。これを同時に施文した縄文を器面に施文する技法、施文は、神奈川県三浦市・

市内で発掘されるのは、「羽状縄文系土器」で、この系統の土器は、早期終葉の繊維を含む茅山式土器の延長線上に位置付けられていて形成されたとい

羽状縄文をつくるには、右捻り（捻りⅡ右ネジ）の捻り紐を縦において、横方向に転がすと左上がり右下がり縄目が平行に並び、左捻り（捻りⅡ左ネジ）の捻り紐を縦において横方向に転がすと右上がり左下がり縄目が平行に並ぶ。これを同時に施文した縄文を器面に施文する技法、施文は、神奈川県三浦市・

諸磯貝塚に由来し、その文様は竹管の半截・多截施文具によつて付けられ、繊維は含まれていない。◇約5,000〜4,000年前は縄文中期に区分される。海岸線は後退して現在のそれに近くなり、縄文人の集落の規模は大きく変

志木市内では、前期末から中期初頭にかけての数百年間の住居跡や集落の遺跡が確認されてない。そこで、繊維土器の時代に繁栄した縄文人の活動が衰退して定住す

は、との推測もなされている。そのころ、志木市域は住み難い地域になっていた、ということになる。食料を求めて、容易に移動できるキャンプを設けていたか、と考える向きもある。但し、

縄文時代・中期半ばからの遺跡の発見は、市内で著しく増加する。特に、中期中葉から後葉にかけては増加し、「勝坂式」「阿玉台式」「加曾利式」土器の分布が増大する。「勝坂式」は神奈川県相模原市の勝坂遺跡に、また、「阿玉台式」は千葉県香取市の阿玉台貝塚に、そして、「加曾利式」は千葉県若葉区

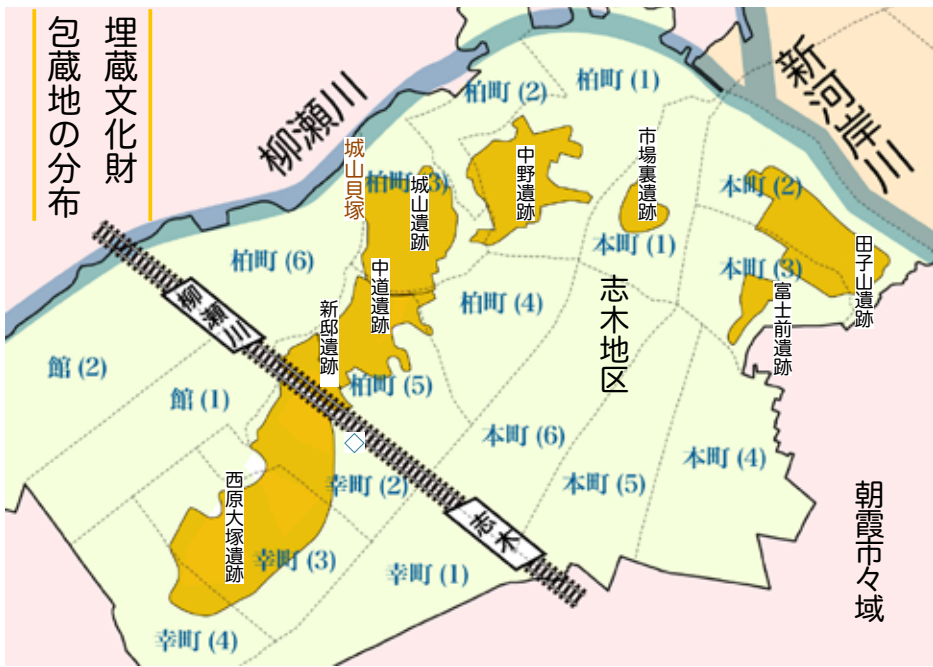
土器は、縄文文様が少なくないが、口縁部に突起の粘土の紐を貼付けて装飾し、全体を豪壮、雄大な造形で表現すること、動物、人物などの顔面把手や蛇を

土器は、縄文文様が少なくないが、口縁部に突起の粘土の紐を貼付けて装飾し、全体を豪壮、雄大な造形で表現すること、動物、人物などの顔面把手や蛇を

土器は、縄文文様が少なくないが、口縁部に突起の粘土の紐を貼付けて装飾し、全体を豪壮、雄大な造形で表現すること、動物、人物などの顔面把手や蛇を

土器は、縄文文様が少なくないが、口縁部に突起の粘土の紐を貼付けて装飾し、全体を豪壮、雄大な造形で表現すること、動物、人物などの顔面把手や蛇を

土器は、縄文文様が少なくないが、口縁部に突起の粘土の紐を貼付けて装飾し、全体を豪壮、雄大な造形で表現すること、動物、人物などの顔面把手や蛇を



「勝坂式・阿玉台式」の土器は、縄文文様が少なくないが、口縁部に突起の粘土の紐を貼付けて装飾し、全体を豪壮、雄大な造形で表現すること、動物、人物などの顔面把手や蛇を

前ページより↓模した把手などが付けられるなどの特徴がある。また、「阿玉台式」は、雲母などを含み、器面に輝きがあり、「加曾利式」土器は、縄文と無文部分が区分され、単純化されている。

すでに本誌の三頁に紹介した、北陸地方で顕著な「火焰土器」もこの時期に相当し、縄文土器の装飾性の極致をゆくものである。

◇縄文時代後期は約4,000～3,000年前で、西原大塚遺跡から「堀之内式期」の住居跡一軒と加「曾利B式期」の住居跡一軒、遺物集中地点一ヶ所が検出されている。また、その他の遺構としては、平成六年（1994）に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点で検出された土坑一基があげられる。

下層から「称名寺I式期」の土器、上層からII式の特徴をもつ土器が出土している。西原大塚遺跡第54地点でも二基の土坑が検出されている。

「堀之内式土器」は、千葉市の堀之内貝塚から、また「称名寺式土器」は、横浜市金沢区の称名寺貝塚に由来する。

◇晩期は約3,000～2,300年前で、気温は二度前後低下し、海面も低下して漁労活動は壊滅的な打撃を受ける。

晩期では、中野・田子山遺跡から安行3C式・千網式の土器片が少量発見されるにとどまり、以降市内では弥生時代後期まで空白の時代となる。

◇日本列島の総人口は・・・

縄文時代には、人口は東国から北国に向かって、西国より多く、関東地方で活動していた縄文人の人口密度は、相対的には大きかったといわれている。

鬼頭宏著「人口から読む日本の歴史」（講談社学術文庫）によれば、縄文早期（～八千年前後）にはほ

ぼ二万人だったが、同中期の最盛期、二十六万人まで増加したという。原始時代としては高度な狩猟採集をもつて暮し、限りのある空間を最大限に利用していたと考えられ、住居跡などから割り出すと、日本の人口密度は、狩猟採集で暮らす社会としては、世界で一番高かったといわれる。

しかし、のち反転して後期に入ると、人口は一気に減少し、十六万人にまで落ち込んでしまふ。さらに、晩期には七万六千にまで減少した、という。住居の数、気候、その他の動静を調べ、人口の動態を推定することは至難の技であるが、以上のデータは、今日広く受け入れられている。

志本市域では・・・

縄文中期に始まった寒冷期が、後期から晩期に掛けて、さらに進行する。縄文時代の後期、晩期の遺跡は激減して、人の居住は無く、通過する縄文人もいなかったのでは、と推測されている。

但し、この頃九州北部や近畿地方では、水稻の農耕を中心とする生産社会が形成されつつ、弥生時代へと移行していた。その流れは東国に向かっていったのである。

一・十 志本市内の埋蔵文化財の発掘が始まったのは・・・

昭和四十八年（1973）なので、すでに四十年余り以前のことになる。当時、市内の遺跡として僅かに知られていた「西原大塚」の発掘の実行だった。

志本市の関係者は意気込みに溢れ、「志本市郷土史研究会」の会員、「朝霞高校」の生徒などにも助力を要請して、縄文中期の住居跡、六つなお、予想を上回る成果を挙げた（その成果は昭和五十年、「志本市の文化財第4集」として公刊された）。

遺憾乍ら、その後、発掘調査は

中断して、再開されたのは十年後のことになる。昭和六十年（1985）に、『城山』で大規模な集合住宅が計画され、五千平米を超える地域で本格的な発掘調査が実行された。文化庁に埋蔵文化財の発掘調査の届けを提出し、記録を保存するために「遺跡調査会」が編成された（成果は、「志本市遺跡調査会調査報告書第4集」として、1988年に公刊された）。

この調査ののち、発掘調査の件数と調査面積は一途に増加するようになり、平成期に入ると、年度遺物出土状態や土層堆積状況とともに、住居の建替・拡張など、当時の人々の具体的な活動を知るための良い資料が得られている。

一・十一 最近の詳細な調査・・・平成二十三年（2011）に発掘調査されて刊行された『西原大塚遺跡第174号地点埋蔵文化財発掘調査報告書』から、精密な調査を引用させて戴き、以下に例示する。

西原大塚遺跡は・・・

今までの調査から、旧石器・縄文時代から、弥生・古墳・奈良・

志本市埋蔵文化財センター

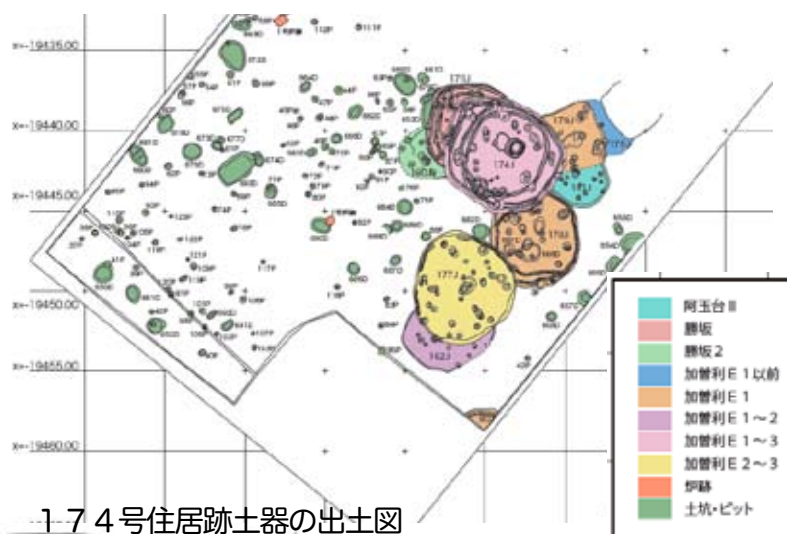
「縄文土器の展示コーナー」



装飾された華麗な土器



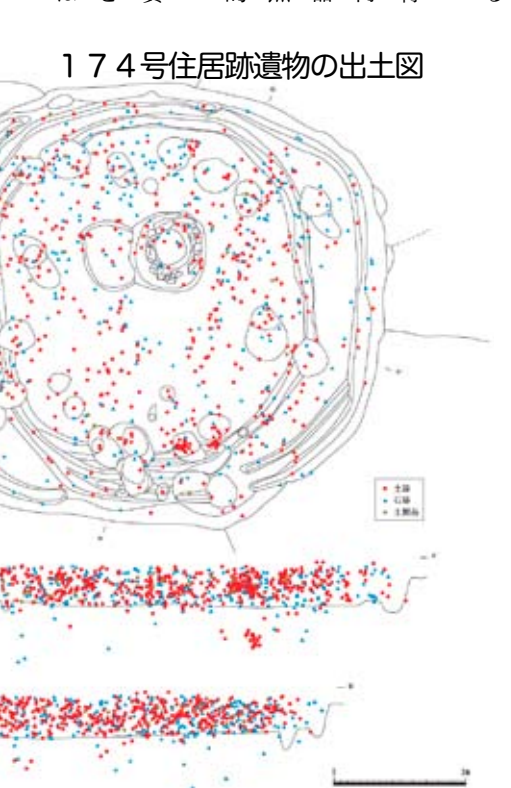
上空からの写真



174号住居跡土器の出土図

縄文時代遺構の分布

平安時代を経て、中世・近世まで、長い時代にわたる複合遺跡であることが判明していたが、特に、縄文時代中期の住居跡は180軒以上、また弥生時代後期から古墳時代の住居跡が300軒以上見つかった。そのほか、それぞれの時代の拠点的な集落だった。



174号住居跡遺物の出土図

次号は、弥生時代、古墳時代へ

「市民フォーラム」の活動

「市民フォーラム」は、地域住民と行政に対して取材活動を行ない、報道によって市民の公共参加を推進します。また市民間のコミュニケーションの増進に努めます。

読者の「オピニオン」（意見・感想）をお寄せ下さい。

TEL 090 (3048) 5502

編集部原宛にどうぞ